2024年２月５日（月）

令和５年度オガサワラカワラヒワ保護増殖事業検討会（第２回）

※未発表の研究内容等は伏字となっております。

議事（１）オガサワラカワラヒワ生息状況調査に関する報告

【質疑応答】

＜資料１「「令和５年度小笠原諸島希少鳥類保護管理対策調査」調査速報」について＞

○環境省（伊藤）　事務局からで恐縮ですが、１点質問よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○環境省（伊藤）　外来ネズミの撮影状況についてですが、７ページの図 2-2 の月平均撮影頻度のグラフを見ると、６ページの図 2-1 の年平均撮影頻度では微減傾向になっている妹島や向島も増加傾向にあるように見られました。撮影数が少ない月があり、それが引っ張っている等、なにかあれば教えていただけたらと思います。

○事務局（中山）　川口様、よろしくお願いします。

○オブザーバー（川口）　川口です。向島を除くと、全体としてネズミは増加傾向ですが、向島でネズミ対策をしていることによって、全体が下がっているような結果となっているかと思います。答えになっているでしょうか。

○環境省（伊藤）　ありがとうございます。妹島も月別のグラフを見ると増えているかと思うところ、年平均にすると下がっているのですが、季節により下がった等、要因はありますか。

○オブザーバー（川口）　そうですね。細かい一つ一つのカメラと、島ごとに細かくカメラを見ているわけではなかったので、今、なぜこうなっているのかをお答えできない状況なので、カメラデータをもう一度を見てお答えできるようにいたします。

○環境省（伊藤）　わかりました。ありがとうございます。

○事務局（中山）　そのほか、委員の方々はよろしいでしょうか。

○川上委員　川上です。よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○川上委員　質問というよりは意見なのですけれども、今のネズミのデータでは、平島だけ除く形で平均をとっていますが、向島でも対策をしているので、対策をしている島としていない島で分けて見られるとよいかと思うので、次回からで構わないので、ネズミ対策

をしていない姉島、妹島、姪島の平均をとる等の形にしていただくと状況がわかりやすくてよいかと思いました。以上です。

○オブザーバー（川口）　わかりました。ありがとうございます。

議事（２）母島属島におけるネズミ類対策について

【質疑応答】

＜資料 2-1「関係機関によるドブネズミ駆除の分担及びスケジュールの改訂について」について＞

○事務局（中山）　既に照会済みということですが、ご意見等ありますでしょうか。よろしくお願いします。

○川上委員　森林総研の川上です。スケジュール全体については、改訂されたということでよいかと思うのですけれども、重要になってくるのが実現の部分で、特に空中散布の手法の確立というところが一つあると思います。東京都があと２年間の間に、姪島と向島で対策を実施すると思うのですけれども、向島については、やっぱり周辺部とか、離島もあることを考えるとですね、空散をしないと、根絶を目指した対策ってなかなか難しいと思うのですね。空散の技術の開発は、令和６年度までとなっていますけれども、実際の進み行きってどのようになっているのか、教えてもらえますでしょうか。

○環境省（小林）　空散技術開発につきましては、現在環境省の事業で、ドローンを使った散布方法を検討していまして、殺鼠剤のパック剤をドローンで散布するための機材を開発しているところです。先日、やっと野外での散布試験をしたというところで、結果については、まだ業者の方で整理中のところではあるのですけれども、殺鼠剤をバラバラと落とすようなところまではできるようになってきています。現在開発している機材は試験機ということで、ちょっと小型のものなので、必要に応じて大型化ですとか、現地に持って行って、断崖等で試験的な散布とか、そういった部分は来年度の早い時期に開発中の機材を用いて実施したいと考えているところです。

○川上委員　はい、ありがとうございます。では、来年度の冬の散布には実用的に使えるだろうということで了解しました。ありがとうございます。

○事務局（中山）　そのほかの委員の方々は、何かご意見ありますでしょうか。

○中島委員　中島です。よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○中島委員　今のドローンの散布の話なのですけれども、技術開発というより中身の話なのですが、ドローンまでの電波が届くのかどうかというようなあたり、現場的には距離の問題です。そのあたりは大丈夫なのでしょうか。技術開発と違う話になるような気もするのですけれど。

○環境省（伊藤）　母島の伊藤です。ちょっと具体のところを再度確認しますが、小笠原の無人島でも、粒剤の散布については、既にドローンの散布実績がありまして、漁船で海岸沿いから操縦する形だったと認識しています。地形上そういうことが同じように母島属島でできるのか、また今開発している機体やその後継機でできるのかというのは、これから検証が必要かと思っております。以上になります。

○中島委員　はい、わかりました。

○オブザーバー（堀越）　すみません、小笠原自然文化研究所、オブザーブの堀越です。質問しても大丈夫ですか。

○事務局（中山）　はい。大丈夫です。

○オブザーバー（堀越）　長期計画ということで、確率はわからないのですけれど、クマネズミが入ってくるということも長期的には想定されており、そうなった場合、監視はしているにしても、誰が叩くか。いわゆるクマネズミが非常に危険だという仮定のもとに動いていますので、そこは長期計画の中に入れていただきたい。クマネズミがいくつかの島の中で見つかったときに、本当に早急に叩く必要があると思いますので、それの役割分担を今のうちから決めておいた方がよいのではないかと思います。そのあたりは今、決まっていますか。

○環境省（小林）　そうですね、この分担スケジュール表の上でいつ発見されるかにもよるかと思うのですけれども、令和８年度以降は環境省が全体を見ていくというような分担になっております。実際のところは見つかったときにまた緊急的にご相談等もあり得るかもしれませんが、現時点ではそのようになっています。

○オブザーバー（堀越）　はい。よい話としては、全部の属島でネズミのモニタリングが今まで以上に本格的に始まるというステージだと思います。ですからどこか他のところ、予期しないときに出たときにどうするかというのは事前に行政間で決めていただいた方がよいかと思いました。ありがとうございます。

＜資料 2-2「平島におけるドブネズミ対策実施状況」について＞

○川上委員　森林総研川上です。よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい。どうぞ。

○川上委員　まず小笠原村さんの平島なのですけれども、資料の１ページ目の地図があるかと思いますが、対象としている、手撒き散布している小属島についてお伺いしたいのですけれども。例えば裏根は散布対象になっていないかと思うんです。裏根ですかね、この平島の南側のところで。あと、地図から見切れてしまっているのですけれども、平島の西側に、小さい属島がいくつかポンポンとあったと思います。そのあたりもおそらく散布の対象にはなっていないかと思うのですが、そのあたりは植生が無くて、ネズミの生息が確認できなかった場所ということでよろしいでしょうか。確認です。

○事務局（中山）　小笠原村の井上様、よろしいですか。

○小笠原村（井上）　小笠原村の井上です。そうですね、調査を行っていただいているアイランズケアさんと現地を見ていただいたりして相談しながら、植生がなかったり、明らかにネズミが生息していないだろうというところは今回の対象からは外しています。アイランズケアさんの方で何か補足あればお願いいたします。

○オブザーバー（後藤）　アイランズケアの後藤です。裏根に関しては、ある程度大きな面積はありますが、植生が一つもないという点と、隠れるような場所もほとんど無かったので、今回は対象としていないです。あと、平島の西側の離岩礁も、基本的には植生はなく、よく波をかぶるような場所なので、ネズミは生息していないのではないかと考えて対象から外しております。ただし、平島でネズミが 10 月に出たのを受けて、このようなところも対象にするかというところは課題として、検討させていただければと思っております。以上です。

○川上委員　了解しました、ありがとうございます。

○事務局（中山）　ほかにございますか。

○亘委員　亘ですけれども、よいですか。平島なのですけれど、同時期に３か所で撮影されたということで、外から来たというよりかは、残存してたものがちょっと出てきたということだというふうに見たのですけれども、これは写真で、例えば成獣とか幼獣とか、そういうことがわかったら、ここの島で繁殖していそうかとか、状況証拠みたいになるかと思いました。実際写った写真はどのような写りだったのかというのを教えてもらいたいのですが。

○オブザーバー（後藤）　井上さん、後藤から話しても大丈夫ですか。

○小笠原村（井上）　はい、お願いします。
○オブザーバー（後藤）　アイランズケアの後藤からお答えさせていただきます。写真を見たところ、幼獣ではなく成獣と考えており、残存していたネズミが繁殖して出てきたと考えました。自然研の橋本さんにも一応見ていただいたのですが、断定はできないが、どちらかというとドブネズミに見えるというような状況でした。
○亘委員　わかりました。そこまで鮮明ではないものが写っていたということだと思います。
　すみません、続いてなのですけれど、その後迅速に対応してくださってとてもよかったと思うのですが、手撒きについて、今回は残った毒餌の在庫を平島にまんべんなく撒いたということだったといます。もう一つとしては、情報があったところにある程度集中して撒くというやり方も考えられるかと思うのですけれども、緊急対策でエサを撒く上での考え方みたいなものがあれば教えてください。
○オブザーバー（後藤）　アイランズケアの後藤です。今回は昨年度よりも手撒きのポスト地点を多くしました。というのも、昨年度、急傾斜地点とオガサワラセセリの配慮エリアの手撒きができなかったので、そちらにネズミが残っていたのではないかと考えました。急傾斜地の方は、可能な限り島の際を歩いて散布しました。オガサワラセセリの配慮エリアも、なるべく配慮エリアに近づいて撒けないエリアが少なくなるように、ということを心掛けて撒いております。
○亘委員　わかりました。ベイトステーションの有効範囲外に重点的に撒いているということで了解いたしました。とりあえず以上です。

＜東京都のネズミ対策事業について＞
○川上委員　すみません、川上です。よろしいでしょうか。資料は無かったのですけれど、東京都さんの対策についてです。今年度に、姪島で年度末に殺鼠剤が撒けるかもしれないという話だったのですが、海況の問題もあってなかなか難しかったということを了解しました。来年度、丁寧に行っていただけるということだと思うのですけれども、やはり天候とか資材とか、人員なんかの問題でどうしても母島属島の散布がなかなか難しくなるところって非常に多くあると思うのですね。なので、ちょっと余裕を持って計画を立てていただいて、来年度は根絶に向けて確実に実施できるように準備をお願いできればと思います。例えば台風であるとか、小笠原だと当然いろいろなことが起きると思うのですけれども、

台風で結局、渡航する予定のときに行けなかったから無理になりましたということになってしまうと、母島属島の保全のことを考えると、そういう理由で遅れてしまうというのはちょっとまずいなと思いますので、多少の自然災害等があっても確実に実行できるように、来年度の計画を立てていただければと思います。よろしくお願いします。以上です。

○事務局（中山）　田巻さんからコメントは何かありますでしょうか。

○東京都（田巻）　はい、東京都小笠原支庁の田巻です。ご意見ありがとうございます。ご指摘のとおり、天候や、そのほかいろいろな不測の事態ということも想定をして対応できるように計画を進めていきたいと思います。また、今、ご指摘いただいたとおり、資材の手配についても、殺鼠剤はダイファシノンがよいのか、ワルファリンがよいのかという議論が以前の検討会の場でもあったかと思うのですけれども、そういった議論を踏まえてから殺鼠剤の手配をかけると、実はまとまった量になると数か月単位で納期がかかるというようなこともありましたので、そういったものも事前に十分に間に合うように手配をかけながら計画を進めていきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。以上です。

＜資料 2-3「向島におけるドブネズミ対策の実施状況」について＞

○中島委員　中島です。

○事務局（中山）　お願いします。

○中島委員　資料 2-3 の、向島の対策の改善案のところについて、一つは改善案を考える方針みたいなことが示されているのですけれども、計画自体がこういうふうに変えましたとか、こういう案でいきたいというところまで書いてないような気がしたのですけれども、そのあたりがどうなっているのかというのと、これは来年度東京都さんの方に引き継ぐということなのですけれども、東京都さん側はこの計画作成についてどのように絡んでいるのかということを教えてください。

○事務局（中山）　最初は伊藤さんですかね。よろしくお願いします。

○環境省（伊藤）　はい。一点目についてですが、例えば計画というのは、具体的にこの範囲にベイトステーション何個増やすとかその頻度を来年度どうするとか、そういった点まではまだ検討ができていないです。

　もう一つが、前回時点では母島属島のネズミ対策について、ネズミの繁殖等の季節性もよくわかっていないということで、今回アイランズケアさんに解析をしていただいて、

こちらも大変ありがたかったのですけれども、今後どれぐらいのモニタリングをしたらその季節性が評価できそうとか、今後でき得る情報収集についてもすこしご助言をいただきたいなと考えておりました。こちらの決まっていない点が多くて恐縮ですが、以上です。

○事務局（中山）　田巻さんからはコメントありますでしょうか。

○東京都（田巻）　はい、小笠原支庁の田巻です。基本的には、伊藤さんからご説明あった通りですね、もう少し踏み込んで、環境省さんの業務の中で現時点の改善策のベースをご検討いただければと思っておりますが、その後は東京都の方で計画部分も引き取りながら対策を進めていきたいと考えております。並行して、東京都の方で来年度からできるような準備を進めております。向島の、例えばベイトステーションの設置範囲の拡大というのがどれくらい現実的に踏査できて数が増やせそうなのか、という現地調査は、今、着手をしているところでございます。それらを踏まえて、具体的に図上だとここを全部埋めたいけれど現実的に現場の安全管理上ここまでは埋められない、みたいなところを検討していかなければいけないと思っておりますので、そういったところは今年度から並行して対応しながら、環境省さんと相談をして都の業務で引き取っていくという進め方を考えております。以上です。

○中島委員　はい、わかりました。ありがとうございました。

○川上委員　川上です。よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○川上委員　向島の対策なのですけれども、東京都さんの方に４月から移行して、僕のイメージとしては、しばらくは今あるベイトステーションでネズミの密度を上げないよう殺鼠剤を充填しながら、オガサワラカワラヒワの繁殖期が終わった後に、秋冬にドローン等を用いて全域で根絶を目指した対策を行う、というようなイメージかと思っているのですけれども、大体そういうイメージでよろしいでしょうか。確認です。

○事務局（中山）　田巻さんですかね。よろしくお願いします。

○東京都（田巻）　はい、田巻です。ご指摘ありがとうございます。イメージ的には概ね近いかと思っております。今年度の対策の中で、向島のネズミの低密度化が維持できていないとお聞きをしておりますので、来年度大規模散布するまでの間はベイトステーションの充填を継続しないとリスクが高いかと考えておりますので、ベイトステーションの充填は、頻度ですとか充填量というのは今後ご相談をしますが、その中で継続をしていく。一方で、オガサワラカワラヒワの繁殖期が過ぎたところでは手撒きをメインで、ドローンを

併用しながら全島での殺鼠剤の大規模散布を実施するというような計画で進めていきたい、とイメージしております。このあたりは、先ほど申し上げた３月の都事業の検討会の中でもう少し具体的に計画としてご議論いただけるように検討していきたいと思っております。以上です。

○川上委員　はい、了解しました。ありがとうございます。

＜ネズミの侵入等に関する緊急的な対応について＞

○オブザーバー（堀越）　度々すみません。小笠原自然文化研究所の堀越、オブザーバーですが質問よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○オブザーバー（堀越）　亘さんにお聞きしたいのですが、クマネズミの侵入って多分一応想定すべき緊急事態で、村が作ったように保護増殖事業としての緊急プロトコルのようなものを作ったほうが動きやすいかと思いました。

　川上さんにもう一つお聞きしたいのは、自然災害、非常に大きな台風等が来て属島の繁殖地がボロボロになったときの緊急プロトコル。いろいろな対策が考えられているとは思うのですが、事業者を別として保護増殖事業としての緊急プロトコルみたいなものは、今後作っていったほうがよいのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○事務局（中山）　最初は亘委員ですかね。よろしくお願いします。

○亘委員　あるに越したことはないと思います。実際の作業とか、毒餌のストックとか、結構コストがかかることだとやりにくいと思いますので、緊急対応といっても本当に直後、１週間後とかに動き始めるというのは結構大変かもしれないのですが、その１年で役割分担とかをあらかじめ決めておいて半年スケールぐらいで対応する、という準備はできると思います。小笠原でもいろいろな問題がある中で、まだ起きてない問題に対して十分備えるということは当然難しいと思うのですけれども、その中でもできる範囲で、役割分担等の検討はもちろん進めておいたほうがよいと思います。以上です。

○事務局（中山）　２つ目は川上委員でしょうか。よろしくお願いします。

○川上委員　川上です。オガサワラカワラヒワについては、災害、例えば夏に大きな台風が来てしまったとか、そういうことがあったときに、今までの経緯から大きく２つあると思うのですけれど、１つは直後のモニタリングの部分ですね。もう１つは翌年の繁殖成功率がおそらく落ちてしまうという、この２点だと思います。１つ目のモニタリングについ

ては、これはもう早急に、それぞれの今の島の分担でよいのかもしれないのですけれども、例えば姪島や向島で何か起こった場合は、東京都さんがモニタリングをその前からやることになると思うので、それを実施していくというのがよいかと思います。そのときに、今、アイランズケアさんがSIMカメラなんかを仕掛けていると思うので、東京都さんのほうでもですね、今後モニタリングで向島や姪島でSIMカメラを導入して、現地に行かずに、ある程度オガサワラカワラヒワの生息状況がわかるような状況を作ってもらえるとよいかと思いました。

それから、翌年の繁殖成功率が落ちてしまうということに対しては、食物が足りなくなるということがあると思うので、以前から計画されている、食物となる種子の供給、餌台の設置みたいなものかと思います。これについては、環境省さんのほうで今まで検討されてきたと思いますので、それを実際に運用するにはどうすればよいかということは改めて話し合うとよいかと思いました。ぜひ、計画まで作れるとよいなと思います。以上です。

○事務局（中山）　環境省さんのほうから、お答えありますでしょうか。現場のほうから、何かコメントあればお願いします。

○環境省（伊藤）　はい、母島の伊藤です。ご意見ありがとうございます。先ほど亘先生からも話があったとおり、どういうことが起きるのかを１個１個想定しながらとなるとなかなか難しいところはあるかと感じましたが、半年とかのスケールで動きが取れるようにというのは考えてみたいと思いました。あとは、モニタリングについてこちらもSIMカメラの情報をお聞きしていまして、どういうことができるかというのも聞きながら検討したいと思います。人工給餌の検討は、今年度はネズミ対策を優先する観点等もあって１年お休みしたのですけれども、可能であれば来年度からまた少しずつ再開できればと思っています。アイランズケアさんの自主事業のほうで給餌台で実際にオガサワラカワラヒワに給餌できた例もあったとお聞きしてまして、そのあたりの結果も改めて伺いながら考えていければと思います。以上です。

＜資料2-4「母島属島におけるネズミ類対策計画（案）」について＞

○川上委員　川上です。資料2-4ですが、３ページ目の対象島嶼の基本情報ということで、丸島瀬戸から母島にかけての小属島については再侵入リスクが高いため、計画の対象から除外したと書かれています。ここはネズミの対策を行わないということでよいかと思ったのですが、川合先生からのお話だと、鰹鳥島のあたりはドブネズミだということが、ほぼ

確認できたかと思います。この地域にドブネズミを残しておくことは、母島から平島側にクマネズミが侵入していく足掛かりをなくすというか、侵入防止のための障壁になるかと思います。ドブネズミがいることによって、鰹鳥島のあたりにはクマネズミが侵入できないと。もしここを空白地帯にしてしまうと、逆に母島側から近いのでクマネズミが侵入しやすくなって、鰹鳥島のあたりにクマネズミの集団ができてしまうと、そこから先の丸島、二子島にも侵入しやすくなってしまうと思うのですよね。そう思うと、僕は丸島瀬戸から母島にかけてのドブネズミ分布エリアは、あえてドブネズミを残しておくことによって平島側へのクマネズミの侵入リスクを低減させるための障壁にする、という考え方の方がよいのではないかと思います。いかがでしょうか。一旦以上です。

○事務局（中山）　これはどうしましょうかね、いかがでしょうかという問いかけなのですが。

○環境省（伊藤）　環境省母島の伊藤です。川合先生、ご報告ありがとうございました。また川上先生もご助言いただきありがとうございます。現状ですけれども、捕獲圧をかけても丸島、二子島と鰹鳥島はそれぞれ５個体以下、特に鰹鳥島と丸島は２個体くらいしか捕獲できない状況でして、島も小さいですがネズミの密度もわからない状況というところです。そういった中でもやはり小さい島にドブネズミを残しておいて、そういうクマネズミの障壁になる効果が期待できるのか、そういった点はもしご意見があればご助言いただければ幸いです。

○事務局（中山）　よろしいですか、川上さん。検討するということだと思うのですけれども。

○川上委員　そうですね、あと亘委員の意見も聞ければと思うのですけれども、お願いします。

○事務局（中山）　それでは亘委員、よろしくお願いします。

○亘委員　今、鰹鳥島の位置をインターネットで確認していたところなのですけれども、確かに距離があるので、ドブネズミがここに到達するリスクが低そうで、ドブネズミを駆除してクマネズミがここに侵入してしまうと、侵入頻度は低いでしょうけれど、クマネズミという厄介なやつが侵入する可能性を残してしまうと。そもそもの優先順位として鰹鳥島とかは低いかと思うので置いといて、今、川上さんが言ったように、ドブネズミを置いておくことでクマネズミの侵入防止ができるというのがあれば、結構助かるとは思うんですよね。ただ、本当にそうなるかどうかはもちろんわからないわけで、とりあえずは川上

さんが言ったことは魅力的であるけれども、もちろん明記はしない上で、結果的に優先順位が低いのでとりあえずは置いておく、という方針でよいと思います。ただ今の話をここの皆さんで一度共有して頭に残しておいて、時間が経った時にまた議論すればよいかと思います。以上です。

○事務局（中山）　川上委員、よろしいでしょうか。

○川上委員　はい、大丈夫です。では念頭に置きながらこの鰹鳥島等の扱いを考えていくということで、お願いできればと思います。以上です。

○事務局（中山）　そのほかございますでしょうか。中島委員はございますか。

○中島委員　大丈夫です。

××

議事（３）オガサワラカワラヒワの生息域外保全について

【質疑応答】

＜資料３「オガサワラカワラヒワ生息域外飼育繁殖計画について」について＞

○川上委員　森林総研の川上です。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○川上委員　域外飼育について、何とか、飼育下繁殖を一例でも成功させるというのが今、重要なことかと思います。前の保護増殖検討会の時だったと思うのですけれども、今、比較的飼育個体数が確保できているので、例えば内地の動物園にも１ペア持っていて、飼育をトライアルしてはどうかというようなことを言ったような、言ってないような気がするのですけれども、内地に持っていくというのは議論されていますでしょうか。お願いします。

○事務局（中山）　これは深道さんですかね、田巻さんですかね。どちらでしょうか。

○東京都（田巻）　はい、田巻の方からご回答させていただきます。もともと今の骨子案の中では、川上先生からいただいたご意見を踏まえて、内地でも飼育できるようにという方向での記載ということで整理いただいているかと思います。一方で、具体的な内地での飼育に向けての調整というのは、まだ具体の検討というところまでは至っておりませんけれども、まさにこの骨子案の見直し、それから保護増殖事業の中の具体的な計画の見直しというステップを踏みながら、今後調整をしていきたいと考えております。一方でその受入れをしていただく動物園側の体制として、日本動物園水族館協会の方でもオガサワラカ

ワラヒワの検討会というのを実施いただいておりまして、その中でも少し議論に着手をいただいた状況にはなっております。ただその議論の中での状況をお伝えしますと、今後の検討事項としては十分進めていただけそうな状況ではあるのですけれども、やはり検疫体制等々がございますので、すぐに内地での飼育に着手するというのはなかなか難しそうというのを、日本動物園水族館協会の検討会の中では雰囲気としていただいたところになります。とりあえずのご回答としては以上ですが、川上さん大丈夫でしょうか。

○川上委員　はい、了解しました。飼育下繁殖の成功というのも、これも非常に重要なことで、東京都さんは属島のネズミ駆除もあってなかなか大変だと思うのですけれど、やはり最初の１ペアが繁殖に成功しても、それをパカパカと殖やせるような技術になるまでにはもう一段階、時間がかかるかと思います。そう考えると、いかに一つがい目を早く成功させるかというのが、次の段階への移行にかかっていくかと思いますので、拙速にならないように気を付けながらも、早めに進めていただけるようにお願いできればと思います。以上です。

○事務局（中山）　上野の高橋さん、何か補足ありますか。

○オブザーバー（高橋）　上野動物園飼育展示課の高橋です。先ほどの田巻さんのコメントの通りで、日本動物園水族館協会の中でも協議をして、より慎重に受け入れられるように検討を進めているところです。以上です。

議事（４）その他

【質疑応答】

○オブザーバー（堀越）　僕でよいですか。２つありまして、ご存知のように、ネズミ駆除は兄島の外来ネズミ対策の検討会が 10 年以上走っています。私も亘さんも川上さんも、その１人だと思うのですが、今度は母島全島のオガサワラカワラヒワのためのネズミ駆除が本格的に走り出すと思うのですが、ぜひ住民に対してオガサワラカワラヒワのためだけではなく、いわゆるネズミがいなくなることで、それぞれの属島の自然環境が大変改善される、いわゆる保全対象だけではなくて、どのような自然が回復していくかということを、モニタリングができなくても、ぜひしっかり説明していただければと思います。メリットが何かということを客観的にまとめていただければ。

　もう１つは、保護増殖事業計画の中で住民に対する啓発を皆で一緒にやろうということが入っていると思います。それにつきましては、「ヒワポッポの日」で、コロナが終わ

りまして、父島と母島で150名ほどの住民が集まってオガサワラカワラヒワの最新の話をアイランズケア川口さんから聞きまして、住民は非常に興味というか、気にしているということを紹介させてもらいます。それから、このような絵本を２つ、１つは小笠原自然文化研究所で、もう１つはオガヒワの会で、今年作成して住民及び関係者へ配付しております。これは報告です。ありがとうございました。

○環境省（伊藤）　母島の伊藤です。堀越さんありがとうございます。まず、ネズミ対策については、現状の住民説明会はやはりオガサワラカワラヒワがメインになっているということですが、その背景には植物や陸貝にもよい面もあるだろうというご意見がある一方で、ヒアリングした専門家の先生方からは、特に陸貝に関してリバウンドによって逆に悪い結果になってしまう可能性もあるといったご指摘もあった中で、どうしていくかも現状検討中なところがあり、そこまで踏み込んだお話はしていなかったのですけれども、今後の結果も見ながら必要な情報はお伝えできるようにしたいと思っております。

ヒワポッポの日についてもご報告ありがとうございます。実は川口さんにもご報告されるかご相談させていただいたのですが、普及啓発として行政機関が実施している内容の全体像もこちらが出せていないため、単体ではなく全体像を説明したほうがよいのではというご指摘をいただき、今回は入れ込んでおりませんでした。私も参加しまして、島民の方の関心の高さを改めて感じたところです。今後、オガヒワに関するいろいろな分野において、どのようなことがされているのかというのも、年度の１回ぐらいは一覧できるような形で共有していけたら、というのはイメージですが考えております。以上です。

○事務局（中山）　ありがとうございました。それでは、そのほかありますでしょうか。先ほど伊藤さんから、資料2-1の分担とスケジュールについてここで決定したいというお話がありましたけれども、ご意見等ありますでしょうか。

○川上委員　川上です。よろしいでしょうか。

○事務局（中山）　はい、どうぞ。

○川上委員　お示しいただいているものでよいかと思いますし、おそらく何か重大な予想しないようなことが起こったらまた改めてこういう場で議論できるかと思いますので、修正は可能だと思いますので、一旦よろしいかと思いました。今のオガサワラカワラヒワの状況については、今年度は非常に繁殖成績がよくて、一旦確認される個体数が増えて、ちょっと一息つけたかなというのが関係者一同の思いかと思います。ただし、増加したのはあくまでも生まれた若鳥で、繁殖に貢献する個体数がそれほど増えたのかというと、まだ

それほどでもないかと思っています。むしろ、恐ろしいのはネズミも増えてしまっているということだと思います。どこかで台風が来たりして、食物不足が間違いなく起こるのではないかと思っています。その時に、増加したネズミが、食物が欠乏してオガサワラカワラヒワの巣にまた向かってしまうことは十分に考えられるかと思います。そう思うと、今はちょっと一息つけているかのように見えて、実はオガサワラカワラヒワとともに増えているネズミが増加して、その脅威がいつ襲いかかってくるかわからないという非常に緊張感のある状況です。なので、今、オガサワラカワラヒワが少しでも増えている中で、いかにスピーディーにネズミ対策を進めていくか、また飼育下繁殖を進めていくかが非常に重要になってくるかと思いますので、関係者の皆さんよろしくお願いします。以上です。